

ちょぼ

「丶」は漢字だろうか。

そう漢字である。JIS の第 2 水準 48 区 06 点で、音は「チュ」である。「ともし火」という意味を持つ、れっきとした漢字である。

縦・横・斜めの線が何本か組み合わされて構成されるのがいかにも漢字らしい。ところが 1 画だけで漢字であるものがある。右表の 8 字は漢和辞典の部首になっているものだが、それなりの意味を持っている。

文字	音	意味
一	イチ	数字1
丨	ゴン	上下に通ずる
丶	チュ	ともし火
丿	ヘツ	右から曲げる
㇇	イ	流れる
㇆	フツ	左から曲げる
㇀	イン	隠れる
丨	ケツ	かぎ

「一」は日常使われるものだから、よくご存知のはず。その他の文字は文字を校正する部首として使われることはあるが単独で使われることはまずない。7 番目の「イン」は「隠」の古字であるが、今は「禮」の正字（略字）である「礼」や「札」の旁として以外には見かけることはない。

さてここでお話しするのは、「丶」である。読点と見間違えるほどの形状のこの文字は独自の意義と音を持つ漢字である。

この文字は燃えている灯心の象形である。だから篆書では右図のような雨垂れ坊やの形である。



この文字は康熙配列の第 3 番目の部首である。これが部首に立てられているのはこの部首を持つと考えられる文字がいくつかあるからである。「之、丹、主」などがそうである。といっても「之・丹」には灯心の意味はない。

康熙配列ではその文字の意義を含む箇所を検索の部首とする。「羸」は「貝」、「夢」は「夕」、「致」は旁の「攴」が検索の部首である。（常用漢字では「攴」を「攴」と書くために最近の辞書では「攴」の部首に配列されているものが普通だが）。

これほど意義を大事にしている康熙配列であるが、ある漢字が意義的・字形的にどの部首にも入れようがない時、字形の類似している部首に押し込んでしまうことがある。



「之」は足の象形である「止」と出発点を表す「一」との組合せで出発点から 1 歩踏み出す指事文字で字義は「往く」である。上は甲骨文、下は篆書である。



であれば「止」の部首に配列してしまえばよいものを、あまりに字形が変わってしまったからか、あるいは「往く」という意味より「助詞」としての使われ方が多くなって意義が変わっ

てしまったからなのか「丶」に収めた。

「丹」は辰砂を採る井戸の形で辰砂の存在する注目点を指し示すための指示である。

ところが「主」は違う。「主」は「ナベブタ」に土ではない。「あるじ」なのだから下は王であると言う人がいるが、そうではない。篆書では右図のような「火とし台の火皿の上に火が燃えている」形で象形文字と言う。つまり「灯火（丶）」の意味を持つ文字である。第1画はともし火の表象としての「丶」でなくてはならない。



楷書で「マダレ」「ゴンベン」の第1画を点に書くが、これは楷書の筆法上許されることであり、元来の形は縦棒であろう。しかし、「主」は楷書であろうと明朝であろうと点なのである。



「丶」を縦棒にする向きがある。デザインでそうすることは問題ないと思われる。しかし、点を縦棒にした文字を「旧字体」として考える漢和辞典があるがこれは論理的におかしいのではないかと思えるのである。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000